

# 聞き取り調査

## シベリア抑留記

愛知県 伊藤 専一

出生 大正七（一九一八）年十一月六日 愛知県名古屋市中で生れる

私は昭和十四（一九三九）年一月三十日現役兵として、大阪に集合し四、五日後に満州に向け出発、ハイラルの満州四九〇部隊（砲兵）林隊に入隊しました。

砲兵部隊ですから砲を引く張る馬がおり、その世話をするのが大変でした。

一期の検閲が終わってすぐにノモンハン事件が起き、第二次ノモンハン事件に私達は迫撃砲をも

って後方部隊として、事件終結の九月十六日まで参戦しておりました。

終戦は昭和二十年八月十五日ですが、私の部隊は九月二日に武器を捨てました。

中国の命令で日本人の家財道具を日本に送るための荷作り作業をして、中国に引き渡しましたが、その後のことは分かりません。そして二週間後にソ連が東京ダモイだといって、有蓋貨物車に乗せられました。貨物車の中は真ん中にストーブが一つあるだけでした。扉は逃亡を防ぐためか外側で施錠されました。しかし、日本に帰れるとは真つ赤な嘘で、ハイラルを出て満州里を過ぎシベリア鉄道の駅チタに着き、そこから更に西に向かい着いた所がイルクーツク駅だったので。列車は走

るより止まっている時間が長く、イルクーツクに着くまで長時間掛かりました。貨物車の中の食事は量はまあまあというほどでありましたが、騙されたことに憤りを感じわめき散らしたがいかなともできず、イルクーツク郊外のダーウエンダーの収容所へ、十月の初めに私達千七百人の日本人は収容されました。兵隊ばかりではなく、ソ連軍の日本人狩りで集められた働ける者ばかりの開拓団の人や満鉄の職員などの混成の集団でした。

入ソしても階級章は付けていましたが、二カ月ほどしてから、もう軍隊ではないと取り、私も金筋一本に星三つの曹長の襟章に、バイバイとさよならしました。それからは、それぞれの責任者は互選の形で選んでいました。

私達のこれからの住家となる家は板葺きの屋根に土壁の、三十メートルほどの細長い家で、真ん中は通路で両側が板敷きの部屋で、ペーチカが二つと暗い電灯が二つぶら下がっていました。部屋の中に二つのペーチカのお陰で、部屋の中はどう

にか寒さをしのぐことができませんでした。

収容所の食事については、食べる量は空腹に耐えるだけでしたが、質が問題で黒パンなどは上等の口で、一番こたえたのはコウリヤンでした。完全に精白してあればよいのですが、いわゆる三分つきか四分つきくらいですから、固い皮がほとんど残っている。炊いたからといってその皮は柔らかくならない。そのため痔を悪くする者、下痢をする者の続出です。私も糞詰まりを度々起こし、うんうん呻りながら指でほじくり出していました。冬は外で何もとって食べる物がなく野菜が食べられないので鳥目（夜盲症）になる者も大分出たようです。夏になると草木が芽を吹き食べるものもあります。記憶に強く残っているのはカーシャ（日本で言えばお粥のようなもの）に川で採った藻（も）を入れて食べたことです。

一週間に一度くらいの割合で入浴があります。入浴といっても浴槽にとっぷりと浸かることではなく、部屋の中で石を焼いて、それに水をぶつ

かける、いわゆるサウナ風呂です。これがまた熱い。汗がどつと出て三分と中におられない。外の部屋で身体の垢を擦り落としていました。

部屋の中は南京虫の巣窟になっており、疲れて痩せた体を横にすると、壁の隙間から南京虫がぞろぞろと出てきて、私達の生き血を吸い取ります。幾ら潰しても潰しきれるものではなかった。それとシラミに悩まされます。入浴の度に衣類を熱く熱した部屋に入れて蒸し焼きしますが、効果はほとんどなかったのです。

厳寒といわれるシベリアです。一番寒いといわれたのは五〇度くらいか。その寒さの表現に困りますが、始めての冬では凍傷になる者も大勢いました。しかし二年目からはほとんど凍傷にかかるものはいなくなりました。夏の暑さは結構暑かったです。日陰に入りますと涼しく感じていました。

労働（ラボータ）ですが、最初の一年間は伐採をやらされました。四十分くらいかかる山まで歩

いて作業しますが、一日の作業量（ノルマ）はきつかった。ノルマが達成できないと、意地の悪いカンボーイ（監視兵）は達成するまで山から返さないと厳しいものでした。けれども中には理解してくれるカンボーイもいて助かることもありまして。

一年経つてから、帰国するまで道路建設をさせられました。夏はノルマで苛められましたが、冬は寒いのは仕方がないが、仕事は楽でした。道路の側溝を掘るところへ、製材所から持ってきたおが屑を厚く盛って、それに火をつけておきます。

翌日燃え尽きている灰を除けて、ツルハシで掘ります。二十センチくらいの深さまで掘ることができですが、それ以上は無理です。仕事になりません。またおが屑を盛って火をつけておく。その繰り返しでした。帰国するまで給料というものは全くもらえなかった。また日本へ手紙を出すことも許されなかったのです。

死没者が出ると下着一枚にして、製材所から持

## シベリア抑留記

愛知県 高木昇 一

って来た板で棺桶を作り、入れて、冬は雪が解けて穴が掘れるまで積んでおきます。初夏のころになると穴を掘って埋葬してました。私たちの収容所では二百人ほど亡くなったと聞いております。

この戦友たちは日本に帰ることができず、シベリアの凍った土の中で、懐かしい日本に早く帰りたといと今でも待っていると思いますと、今の私は本当にすまない気持ちでいっぱいです。

私は大正十四（一九二五）年九月春日井市味美西本町で生まれました。

大東亜戦争激戦の最中で、徴兵検査は繰り上げとなり十九歳で昭和十九（一九四四）年の徴兵検査を受けました。現役兵として入隊する「第一乙種」に合格。翌昭和二十年二月十日兵庫県加古川市の部隊に入隊しました。そして四日目に加古川市を出発、満州に向いました。もうそのころはアメリカの潜水艦が日本の近海をうようよとして、日本の船と見ると片っ端から魚雷を撃ち込んで沈めていたころでしたから、博多から朝鮮の釜山までの船はこれが最後になると言われ、それに乗船させられて釜山に着くまでは戦々恐々としていましたが無事上陸することができました。

そして満州へ、着いたところは北満の国境に近